

# 「タイス」研究ノート

近藤 矩子

- 一、リュシアン・プシカリの「まえがき」について
- 二、「タイス」の本質―アンチ・クレリカリスム―未刊の「序文」
- 三、長詩「聖女タイスの伝説」
- 四、マドレーヌとリュコノエからタイスへ
- 五、パフニユス
- 六、むすび

一、リュシアン・プシカリの「まえがき」について

①一九六九年春「舞姫タイス」が教科書版として出版された折、編註にあたった筆者のもとに、リュシアン・プシカリ氏は私信のかたちでかなり長文の「まえがき」を寄せられた。この「まえがき」が、こんにちのアナトール・フランス研究―または理解―の方向と水準とを、かなりはっきり

りと示しているという意味で、日本の研究者、読者にとってはいささか目新しく感ぜられたらしいので、ここにあらためて取りあげてみたい。

まずリュシアン・プシカリ氏の生いたちについて一言しよう。彼はミシエル・プシカリ―その兄エルネスト・プシカリと同じく第一次大戦において戦死した―と、A・フランスのひとり娘シュザンヌ・フランスとの息子として、アナトール・フランスの唯一の子孫である。(また父方からいえば、エルネスト・ルナンの曾孫でもある。)少年時代に父母を失って、晩年の文豪の手許で育てられた。当然のことながら、彼は真率な敬愛の念を祖父によせており、その点おのが若き日にA・フランスに傾倒私淑した故グリユヌバウム・バランや、クロード・アヴリーヌや、その他の人々と共通するものをもっている。彼自身をふくめ、これらすべてのアナトール・フランス愛好者は、それぞれ確固

とした抵抗者<sup>レジスタン</sup>でもあった。とくにこのことに触れるのは、この間の事情を知らない、「まえがき」のもつ一種の調子の高さが理解されないのではないかと思うからである。第二次大戦の戦争と占領の時代は、真にフランス的な作家、そして「自由」の思想家としてのA・フランスを再確認する時期でもあったのだ。彼の誕生百年記念祭は、一年ずらして解放後の一九四五年四月に全国的に行われたが、このときの記録「アナトール・フランス誕生百年記念論稿集」<sup>⑧</sup>は、そのことをよく物語っている。それらの催しのうち、他のものに先立ってまずヴィラ・サイド<sup>⑨</sup>で行われた集会は、まさにパリ解放委員会と、アナトール・フランス協会—その会長ジャック・リヨンの生死は当時不明であった。彼はついに収容所から帰って来なかった—との共催だったのである。

さてリュシアン・プシカリ氏の「まえがき」をここに一応訳出させていただきます。

「親愛なる夫人よ、

大学においてフランス語とフランス文学とに触れつつある日本の学生諸君のために、『タイス』より抜萃せる一書を編んでおられる由、わたくしは心からこの企てを悦び、かつその成功を祈るものであります。フランスはつねに日本から学ぶものをもっているのでありまして、千年の星霜を閲しつつ、今なお進歩

の第一線にたつ貴国の文化のなかにひろめられることは、わがフランス文化の名誉であります。

アナトール・フランスは、先達はつねにわれわれに教えるところがあると考えておりました。そしてわたくしどもは彼について、彼をも含めて偉大な人々は、先達の教訓に学ぶものと考えております。彼の遺した教訓といえ、それは何よりもまず、正義と自由にたいする情熱に燃え、しかも、正義の不確かさと自由の値打ちとを悟れる一思想家のそれでありました。そこからして、個人生活において自信が必要であるのと同様に集団生活において必要な、社会的なオプティミスムによって修正せられたところの、懷疑主義とペシミスムとが生れました。

普遍的悪の作家であったフランスは、世界の不条理性を身にしみて感じとっておりました。彼の全作品は誤謬と詐術とを一掃することに向けられており、もっとも多くの場合それは人を傷けずして改めしむるに適切な、イロニイという手段によってであります。ひとは彼を目して破壊者といいました。必要な廢墟を準備した、という意味においてそれはあたっております。人類の進歩に寄与したすべての人々は、同じように行動したのです。しかしかくもおぼつかなく、かくも多くの迂余曲折を経るこの進歩なるものは、フランスが彼の『ジャンヌ・ダルクの生涯』の序文においてたからかに謳いあげた、人類にたいするかの熱愛<sup>⑩</sup>なくしては、考えられぬところのものであります。彼はよりよき時代を希求し、その到来のために戦いました。彼はブルターニュにおいて、ルナンの記念像をまえにして『ゆっく<sup>⑪</sup>りと、しかし休みなく、人類は賢者の夢を実現してゆく』と申

しました。彼もまたアンティゴネのごとく、憎しみのためにではなく、愛のために生れたのであります。

すべてこれらのことを、親愛なる夫人よ、あなたはわたくし同様ご承知であり、そしてそれをあなたの若き同胞にお伝えくださるでしょう。その人々はあなたから『タイス』が十八世紀の流れを汲む哲学小説であり、また『砂漠の神父たちの生涯』に物語られるキリスト教伝説から題材を得たものであることを、学ぶでありましょう。実際このコント、あるいはこのロマンは、古くもなければ新しくありません。それはドン・キホーテや、ガリバーや、カンディードのようにヨーロッパのみに例を限って申しましたが―世界文学に属するものであります。アナトール・フランスは、ここでキリスト紀元四世紀におけるアレクサンドリアの復元を試みたのではなく、彼の同時代人たちのために『哲学および道徳の挿画つき入門書』を編んだのであります。彼は申ししております。『神の正義は人間の正義とはちがうということを明らかにするために、わたしはパフニユスがタイスの魂を救おうとしておのが魂を滅ぼすようにしたかったのだ』（一八九四年四月十四日の『リュニヴェール・イリュストレ』紙）

『タイス』の物語は、異教とキリスト教とがまだ相戦っていた時代に設定されております。すみれ色の眼をしたこの娼婦はまた、昔時のあのリュコノエ、フランスによって『黄金詩集』に歌われた。

『……ここそのままに、ひたぶるに

おきなごを崇め、神を泣く』

リュコノエの、孫むすめともいえるのであります。

彼女の回心の可能性はここから生じてまいります。それは自然の掟、ルクレティウスがいうところの『事物の本性』のそれと、小説の背景をなすところの当時強力であった宗教伝播の必要とのあいだの、葛藤であります。乱行をきわめたタイスは、僧パフニユスによって回心いたします。そのパフニユスは、ついに本質的に神なるもの、すなわち愛に屈するのであります。かくして運命の環は閉じることになります。

あなたのお編みになる『タイス』が、親愛なる夫人よ、ねがわくば多数の人々をして、自由の精神に導くところの精神の自由のうちに学ぶことを、得せしめんことを祈りつつ。

リュシアン・プシカリ

この「まえがき」にちりばめられた引用文は、フランシヤン研究者にとって熟知のものではある。しかしここに言及された史伝「ジャンヌ・ダルクの生涯」―これは彼の長篇小説の三篇ないし四篇に優に匹敵する大部の作品である―は日本語に訳されてはいない。またトレギエにおけるルナン記念像の除幕式における演説をもふくむ彼の演説、評論、その他の polemical な活動―これは現在「社会生活三十年」としてまとめられ、刊行されつつある―も、ほとんど直接には知られていない。むろん初期の詩作も紹介されていない。もとより小説が A・フランスの文学活動のもつ

とも重要な部面であることに異論の余地はない。にもかかわらず、それ以外の面で彼ののこした著作が、量的には実に尨大であり、質的には小説作品と不可分の関係にあって、これをぬきにしてA・フランスを論ずるのは不当かつ不可能であることを思えば、ある種の小説や追憶の書に重点をおいた一般への紹介のされかたが——本邦においてのみならずフランス本国においても——きわめて偏ったアナトール・フランス像の形成をまねいてきたことが惜しまれるのである。

## 二、「タイス」の本質——アンチ・クレリカリス

### ム——未刊の「序文」

さてプシカリ氏の「まえがき」に、もし多少読みとりにくい傾きがあるとすれば、それは彼が「タイス」の反宗教性についてあからさまに語ることを避け、「破壊者」アナトール・フランス、そして「事物の本性」と「愛」とについて婉曲にのべるにとどめているからではあるまいか。がもとより「タイス」の読者にとって、その尖鋭な反宗教的あるいは反キリスト教的な性格を見落すことはできない。それゆえここではまずその本質に若干の光をあててみることにしよう。

「タイス」は、A・フランスがアルマン・ド・カイヤヴェ

夫人との結びつきにおいて書いたさいしょの本である。このことはさまざまの意味をもっている。すなわち第一に、それはA・フランスがヴァレリー・ゲランと一応平穩な家庭をもち、文壇においても相当の地位を得、その発言がかなり保守的にみえた時期の終りを意味する。そしてさらに「タイス」は、ジェローム・コワニヤール、ベルジュレ氏とつづく、論争的、批判的なA・フランス文学の始まりでもある。それはいわゆる「曲り角」<sup>トルナン</sup>の道標である。

しかしながらアナトール・フランスのアンチ・クレリカリスムは「タイス」においてとつぜん現われたわけではない。彼はつねにキリスト教にたいして官能的な反応<sup>サンジュエル</sup>のみを示し、僧侶に敵意を抱いてきた。初期の詩作、とりわけ詩劇「コリントの結婚」(一八七六年)の反キリスト教性は、見誤まりようもなかった。この書物を贈られたジュール・サンドは、次のような手紙で謝意を表している。

「御作は古代そのままの美しさとみずみずしきとをもち、あらためてわたくしに、キリスト教的な不健康な書物、今日ますます引き歪められ中傷されるイエスのみことばの誤れる解釈を慨嘆させました。あなたの詩はこの嘘言を真向から打ちひしぐものであり、力強いがゆえに美しいのです。もっとお書きください。この死の教義にたいして、生命のために復讐してください……」(一八七六年四月二十六日)

「コリントの結婚」と「タイス」とのあいだには二十年以上の歳月が横たわっている。前者の若々しい反抗の叫び―「苦悩が心になう悲しき神よ、よろこぶがいい！」―は消えて、鋭い悪意を底に秘めた作品が生れた。「タイス」の特徴は、きわめてキリスト教的な素材、語彙、文体が用いられていることである。その意味で、かつてA・フランズが「コリントの結婚」の序文に書きこんだ次の皮肉な句は、むしろ「タイス」にこそよく該当するものであった―「わたしはこの本のなかで、壮大かつ微妙な事柄、すなわち宗教に関する事柄を扱っている。わたしは信仰の時代の夢を再現し、生き生きした信条の幻想をつくった。聖なるものを扱うに敬虔を欠くとすれば、それは調和を乱すことになるう……」聖者伝説から立ち現われたタイスとパフニユスは神秘主義的な語彙をかたり、敬虔なエピソードが断続する。しかもこのみせかけの無邪気さこそが、そのままもっとも激越な反<sup>コントル</sup>護<sup>アポロジ</sup>教なのであった。

一八八九年七月から八月にかけて「両世界評論」に掲載された「タイス」は、同誌の主筆ブリュヌチエールがもっとも反キリスト教的と思われる箇所をあらかじめ削っておいたにもかかわらず、論議をまき起さずにはいなかった。フランスの親しい友人でさえ、すべて賛同したわけではなかった。フレデリック・プレシはのちに次のような手紙を書いている。「……なぜきみはタイスについて書くのに、

ルナンの宗教性とヴォルテールの嘲笑とをごちゃまぜにしたのか。これこそ『カンディード』の読みすぎというものだ」

いうまでもなく、ジェズイットの側からはすさまじい憤激の表明があった。ブリュツケル師は「『両世界評論』所載の一小説について」なる論稿（「宗教研究」一八八九年十二月号）において、「その著者アナトール・フランズ氏、ならびにその鼓吹者なるルナン氏の重ねての悪しき行為」にほかならぬ、聖者伝の「淫猥な」改竄を摘発した。

「……（この著者は）哀れな僧の衣に泥を―たっぷりとはいうまい、彼は趣味人<sup>ラフイネ</sup>だから、あるいは少くともそうあらうとしている男だから―そうではなくて、巧みに量った泥をすこしづつ投げつけているのである。……著者は修道士の生活を滑稽化し、傷けようとしている。がこの小説はさらに高所を狙っているのであり、キリスト教全体を攻撃しているのだ。……このやりかたには……棄教著にふさわしい、きわめて偽善的なところがある。フランス氏がその師のごとく、僧衣をまとったことがあるか否かは知らないが、彼こそはまことに棄教者である。

もしわれわれの先祖にしてこの書物を繕いたならば、三ページで嫌悪をもって投げ捨て、その著者をグレーヴ広場で笞打たせたことであろう……」

「タイス」は翌九〇年一冊の書物として刊行されたが、こ

のときもブリュッケル神父は攻撃を忘れなかった。しかしこれらの非難、告発も「タイス」のかちえた圧倒的な評判と名声のまえには、広い影響力をもつに至らなかつたと見てよい。おそらくそのためであつたらう、A・フランスは一時この攻撃を受けて立とうと思つたのをとりやめ、いちど書きかけた「タイス」のための「序文」は、未完のまま篋底に蔵された。だがこの未完の序文ほど「タイス」の意図を明瞭にしているものはないので、次にこれに触れたい。

まずこの小説に「両世界評論」掲載中「哲学的コント」なる副題をつけた理由（それは「沢山の単純な読者たちにたいし、これは面白くない本で彼等の氣にいらぬかもしれない」ということを知らせるためである）、「主人公の名である」パフニウスというはじめ考えていた題名を、それがやや取っつきにくく思われるので「タイス」に変えたこと、聖女タイスと聖者パフニウスの物語は「十八世紀に子どもたちがすべてそれで読みかたを学んだ」ところの「砂漠の聖者伝」に収められていること、などを述べたのち、彼は次のように書いている。

「わたしは聖女タイスの物語を非常な喜びをもって読んだので、わたしもまたこの話を、自分が読んだそのままにではなく物語ってみたいという氣持になった。わたしは物語の形式と精神とを若干変更した。伝説というものは、あらゆる思想の表現におのずから順応するという、すばらしい

性質をもっている。それらのなかには、感嘆すべき可塑性と、いかなる色合いにも染まりうる貴重な可能性とがある。

わたしのタイスはあるジェズイット神父をたいそう怒らせたが、彼は自分の属する雑誌でわたしに無邪気な悪口雑言を浴びせ、その雑誌をちゃんとわたしに送ってくれた。この心遣いがなかつたならば、わたしは神父をも彼の憤怒をもいまだ知らずにいたわけである。これと時を同じくして、オデッサで刊行されているある雑誌が、わたしの物語はギリシャ正教の教義から外れているといつて、同様の憤激をこめて非難して来た。何としてもどうせこの両者をも満足させることはできないのだと思つて、わたしはどちらをも満足させなかつたことをみずから慰めている。

実をいえば、神父の悪口はわたしをよろこばせたのだ。彼はわたしのコントを読んでくれたのであり、それどころか、あまりによく読みすぎたので、彼が聖女タイスと聖者パフニウスの物語をもとの純粹さにおいて物語ろうとしたとき、わたしの創作した細部を思わずしらすそこに持ちこんでしまつていたのである……」こういつてその細部なるものを一々指摘したあと、いまこそルナンふうの甘さをかながり捨てたこの序文の下書きは、次の冷笑で終つていゝる。「彼は自分が滅ぼそうとした毒をいささか飲んでしまつたのであり、悪魔は油断ならぬということを、おのが身

のうえに知ったわけである。」

どうやらこの手きびしい反撃は、ブリュッケル神父の非難をまったく正当化するものといってもいい。むしろそれ以上の射程をもつといってもよいだろう。「タイス」の優雅な文体のかけにかくされた悪魔主義的な意図が、ここでははっきりと牙をみせているのである。この意味で「タイス」はアナトール・フランスの哲学小説のなかで、最初の重要な里程標となるのであるが、いまはひるがえって「タイス」のこのような意図が、いかなる道程を辿って実現に至ったのかを、その主要人物像に即して見てみよう。

### 三、長詩「聖女タイス」の伝説

「タイス」の主たる典拠は著者自身明記しているように聖者伝説にあり、これに加えて数多の影響を指摘できるが、それはいま問題としない。ここに述べたいのは、まず「悔悛の聖女タイス」なるテーマはA・フランスが永年抱いていたものの一つであり、そのイメージが年月を経て修正され、豊かにされて、ついにここで完成に達したということである。

その出発点に、ほとんど人に知られぬ長詩「聖女タイスの伝説」が位置する。これをかいた一八六七年にA・フランスはルメール書房に入り、ルコント・ド・リルを筆頭とするパルナシアンたちの知遇を得たのであって、文学者と

してまったく未知数の二十二才の若者が、ようやくそれらしい第一歩をふみだした時期のはじめにあたるわけである。彼の処女出版たる「黄金詩集」すら、これよりさらに六年後なのであるから、ささやかな小雑誌に「目下刊行準備中の詩集より紹介」として、アナトール・フランスの署名いりでかかれたこの二百七十四行の長詩は、あたかも孤立した離れ小島のような作品といった観を呈する。この詩はその後巻に収められることはまったくなかった。研究者たちも、その存在に言及し、せいぜいほんの数行を引くとどめるのがつねである。というのは「聖女タイスの伝説」はその措辞がいかに未熟であるし、テーマも人物像も、八九年の小説「タイス」におけるけんらんたる開花にはほど遠いからである。しかし二十年以上という歳月をおもえば、この二つの作品のあいだの距離よりも、むしろそのテーマの持続性にこそ、驚嘆してしかるべきではあるまいか。次にこの長詩を若干検討してみる。

「そのころ、エジプトびとの国に  
タイスとよぶ美しき女がいた」  
と、詩ははじまる。

「そしてナイルの古き谷に

新しき神を説くべくガリラヤより

来れる重々しき老い人たちは

この女が通ると顔をそむけ

眉をしかめるのであった……」

なぜなら彼女の素行は恥ずべきものだったからだ。彼等はいう、すべて女は怖るべきもの、汚らわしきもの、悪魔の巢、救霊の障りであると。タイスは洗礼をうけてはいるものの、異教徒どもの悦ぶみだらな踊りを踊って恥じない。彼女はアマンドのような眼、官能的なつめたい唇をもち、うすい小鼻はときおり打ちふるえる。ひそかな官能の悦楽に酔うて、彼女はひとり自らの接吻をたのしむこともある。彼女は数多の男の魂をほろぼした。教父たちは彼女を呪う（第四四行まで）。

総督と馴染みのあるタイスは、そんなことは意に介しない。総督は有能な醜い男で、宴席で詩を誦するくせがあるが、ある夕は酔うてタイスの帯を解き、この美しい裸身こそ詩であるとして、客人たちを喜ばせた（第六四行まで）。しかしタイスが愛しているのは、美男で乱暴な百人隊長である。この男がある日、酒のきげんでタイスのことを喋りちらし、総督の怒りにふれた。酔がさめてみると彼は牢に入れられており、迫られて自害せざるを得なかった（第八九行まで）。

タイスはいたく総督を恨み、ふたりの仲は冷たくなる。そのようなある夜、たまたま彼女は月光を浴びて町を横切っていた。かがやかしい彼女のすがたを見る通行人は、女神かと驚き怖れる。だがふと彼女は身慄いする。奇怪な

汚らわしい一群の人々が現われて、行手をふさいだのである。身をかくそうとしても甲斐なく、彼等は十字を切り、手に手に石をもって迫ってくる。それは不潔でむっとするような悪臭を放つキリスト教徒、肉を蔑し<sup>なみ</sup>苦行をよるこぶ人々である。ひとりが叫ぶ―あの女を殺せ。あの女は聖霊の住家なるべきおのが身を汚している―あの女を殺せ、と人々は唱和する。タイスは観念して眼を閉じた、と、力強い腕につかまれ、彼女はもはやわが身は死んだものと思う。がやがてそつと眼をひらいてみると、丈高く、禿頭の、眼光するどく猛々しい老人が立っているのであった。その銀いろの鬚はがっしりした胸に乱れて輝いている。彼はいう―かくも多くの人々が、かって罪を犯したこともないとは、なんと悦ばしいこと。何となれば、おのおのがた、みな石を手にしてわれがちに投げつけようとしておられる。石を投ぐるユダヤびとともにキリストの申されたことを思い起せば、まさしく御身たちのうち何びとも罪を犯しておらぬ筈。さて、わしに云わせてもらいたい、わしをこそ裁くがよい。六十年祈りつづけてなお、わしの肉は哀れな飢餓のうちにある。この肉体を鎮めるためにわしは苦行をし、昼も夜も砂にすりつけたわしの額はあたかもらくだの膝のよう。それでいてわしはみじめな罪びとにすぎぬ。御身らは起って、われらこそは信仰じやという。さればわしは云おう、罪深いのはこのわしじや、女とともにわしを打



つがよい、神のごとく怒りも憎しみももたずに。だがもし御身らのうちに人殺しの心があるならば、御身らこそ呪われた者じゃ。往け、滅びるがよい。カインのように右の手をかくして。その手は萎えるがよい（第一六八行まで）。

この言葉をきいて、悪人どもは石を捨て、こそこそと逃げ去る。タイスは老人の足に接吻していう―わたしのあるじになってください。あなたはわたしに怖れを抱かせるけれども、わたしはあなたを愛したい―すると老人は女にたいうる激しい侮蔑を表明し、タイスは、わたしは恥しい、と答える。彼は、哀れな愚かなる処女よ、今の一言のために、神は汝のランプをふたたび灯したもう、と応ずる。そのときとつぜんタイスは真理を悟り、悔悛の情を示す。幼年時代には信仰をもっていたこと、彼女の抱いていた天の父のイメージはこの老人に似ていたこと―ただ眼ざしはこれほど燃えていなかったが―を、彼女は語る。老人はいう―おまえの汚れた眼、唇をもってしては、神を見ることも祈ることもできない。苦行衣をまとい、独房に立って、神の救いを呼び求めるがよい。「想いに沈んでいた」（この表現は小説のタイスにも用いられる）愚かな娘は、往きましよう、と答えた。それから彼女は一旦自分の住居に戻ることをとめ、そこで美しい衣裳、財宝をことごとく火に投ずる。タイスは渴いた唇を聖なる逸楽の流れにひたそうとするのだ（第二一六行まで）。

老人はタイスを燃える砂漠に導き、彼女は「血の滴る」（これも小説にのこる細部である）足で歩いてゆく。老人は立てた棺のような独房に彼女を閉じこめる―墓に閉じこめるように。なぜなら腐敗墮落せるタイスは死んだからだ。彼女は二十ヶ月のあいだ叫びつづけた。そして二十一ヶ月め、扉をひらいた老人は女の額を見、ひれふして云った―聖なる女よ、栄光が汝を照らしている。わしは汝の祝福を乞う。わしは汚れた羊。善き牧者の名において、わしに望みをあたえよ、言は汝のうちにある、なぜなら言は「苦しみ」であるから（第二四〇行まで）。

しかし、愁わしげな面持ちの天使はタイスの上に降って云った―汝はマドレーヌのごとく、みちみてる汝の心に香料の壺を傾けたのではなかった。故に帯を締め、白き杖を曳いて、砂漠のなかに星をもとめて往くがよい。こういつて天使は一つの星を天に放つ（第二四八行まで）。

タイスは星に従ってゆき、あお白いほのかな微笑をたたえた女に会う。タイスはいう―わたしはあなたのところに来ました、昔マグダラの娘が香料を携えて来たように。女はこたえる―妹よ、わたしは人間らしい優しさに渴えていました。神さまがあなたを連れてきてくださったのです。ふたりはやさしい言葉と接吻とをかわす。天使は悦び、ふたりを翼にかばいつつ、云う―愛しあえよ、なぜなら言は「愛」であるから。（終り）

見られるとおり、この長詩の細部にはところどころ二十年後のタイスのイメージが浮んでいる。すでに二箇所ほど指摘しておいたがそのほかにも、たとえばタイスが衣裳財宝を焼くくんだりもそうだし、また老人がタイスを叱っている。「肉慾の大鍋に煮られつつある」という表現は、A・フランスがのちに「タイス」のパフニウスにも、「ペンギンの島」のヨアネス・タルパにもあてはめて使用しているものである。が、細部はさておき、全体の筋立てをみれば、二十年後の小説「タイス」との基本的な共通点として、次のいくつかのポイントを指摘しよう。

第一、タイスが官能の悦楽を追う美女であること。

第二、彼女における恋と人生にたいする絶望感のむすびつき。

第三、彼女は幼時の信仰に立ち帰ること。

第四、彼女の救い手となる信者の男は、強い意志と人間的弱点をもつこと。

これにたいし、重要な相違点を挙げれば次の三つとなる。

第一、キリスト教徒の不潔、党派性、無智、妄信が、きわめて直接的な表現でのしられていていること。

第二、タイスは「恥じて」回心すること。

第三、回心後のタイスが求め得た「愛」の意味がいま

いであること—あお白い微笑の女は何を示すのであるか。

この相違する三点を裏返せば、それはすなわち小説「タイス」の本質的な特徴となる。まず第一に、「タイス」はもっとも反宗教的な小説でありながら、キリスト教にたいする作者の敵意は巧みにかつ意地わるく、信心ぶかい語彙のかけにかくされている。第二に、タイスは回心のまえもあとも明らかに同じ性格をもっており、かつ第三に、彼女が一貫して追求する愛は、彼女においては肉体的とか聖的とかの区別をもたない悦楽<sup>ゾオリユフテ</sup>であって、なんら瞬昧<sup>アンビキニエテ</sup>さをのこさない。

このように見てくると、長詩「聖女タイスの伝説」と小説「タイス」、この二つのタイスの間には「なんらの共通性がない」とジャック・シュフェルがのべているのも一応肯けるが、さりとてはじめに挙げた四つの共通点も無視できないであろう。これらは小説「タイス」の筋の構成の重要なポイントであるし、とくに恋愛から失意へ、失意から「聖なる逸楽」へとすすむタイスは、すでにそのもつとも根本的な性格を得ているといえるのである。したがって長詩のタイス像から、余分な要素または瞬昧な要素が洗いおとされ、本質的なものが純化され強調されることによつて、小説のタイスへの道がひらけることになる。

#### 四、マドレーヌとリュコノエからタイスへ

さてこのいわば洗い出しの過程において、重要な段階として、マドレーヌとリュコノエなる二人の女性の創造を挙げなければならぬ。「マリアは善きかたとれり」というルカ伝の句をふまえた「マドレーヌのかた」は一八七三年の「黄金詩集」に、ホラチウスの女リュコノエをうたった「リュコノエ」は一八七六年の「コリントの結婚」に、それぞれ収められている。<sup>⑩</sup>

マドレーヌとリュコノエ、これは「愛の宗教」を説明する二人の人物像である。

マドレーヌ（マグダラのマリア）は、心の渇きを訴えながらもなお、

「わたしは善きかたとった……」

わたしは愛を選んだ、わたしは正しかった……

聖なる未知のなかにまで

わたしはそれを運んでゆく」

と歌う。そして彼女がキリストを訪ねてその足に香油をそそいだとき「大地はかぎりなき愛を知った」のである。

追憶の書に登場するエピナルの絵本の話からもうかがわれるように、マリーマドレーヌなる人物をA・フランスは幼いときから印象にとどめている。詩「マドレーヌのかた」は、肉体の愛慾から救霊の冒険につきすすむ女を示し

ている。そしてのちに短篇「レタ・アシリア」に現われるマドレーヌは、キリストの熱烈な愛人として描かれている。この短篇が書かれたのは小説「タイス」に先立つことわずかであることに注意しよう。<sup>⑪</sup>

マリーマドレーヌがキリストの同時代者であるとすれば、リュコノエは詩人ホラチウスの女であるから、やや時代が下ることになるが、彼女は精神的にマドレーヌの血をひいている。そして、貧しい生れの娘でありながら、運命と美貌と男の愛とによって浮世の快楽をきわめ、しかもなお満たされないリュコノエの心は、そのままタイスに受け継がれる。リュコノエの想いには古代のすべての神々エジプトのもギリシャのも――が姿を映してゆく。だがついに彼女は神秘的な「東方よりの息吹き」を感じとって、そこに心を傾ける。

「あなたがただけが地の救いを用意するのだ……」

リュコノエよ、欲望ながき女たちよ、

祝福されてあれ……」

この「ながき欲望」の女たち、「聖なる冒険者たち」は、<sup>⑫</sup>「求める女」だったマドレーヌの後継者として、新しい宗教を伝播してゆく。紀元四世紀のアレクサンドリアにおかれたタイスは、まさしくプシカリ氏のいうように「リュコノエの孫むすめ」であるべきなのであって、長詩「聖女タイスの伝説」における瞬目なタイスは、ここにマドレーヌ

とリュコノエという二つの女性像の創造を経て、いわば夾雑物を洗いおとされ、作者の楽屋に出演をまつこととなるのである。

ではタイスは結局いかなる女か。

それはやはり永遠に愛を探してゆく女であり、肉と聖なるものとの区別にはじめから無縁の女である。彼女は——これはマドレーヌやリュコノエのみならず、A・フランスの女主人公のほとんどと共通する点であるが——精神的怠惰を知らぬ果敢な女性である。が彼女は、ある意味でリュコノエより単純であり無智である。彼女はリュコノエほど多くの神を知らない。彼女が知っているのは奴隸アーメスが幼い彼女に教えたキリストであるが、そのキリストはきわめて東方的、異教的ないかがわしいものである。アーメスの死後十一才くらいの彼女が、女神像をかこんだフリギア人たちの狂おしい乱舞に出逢う一節は、最終的には作品から省かれたが、この一節は彼女をよりリュコノエに近づけるべき性質のものである（「タイスは未知の神に没入して、戦慄しつつ……云々」<sup>⑧</sup>）。しかし小説のタイスはリュコノエとちがって、アーメスの思い出につらなる無限の優しみを人間関係に求めているのみであり、その欲求をみたされずにいるのである。総督の息子との激しい恋も、ついに虚しさの味のみをのこして終った。そして彼女がニシアスの愛を重んじないのは、かれが知的にすぎて、その愛は彼女の

必要とする「放棄」とは縁遠いからである。古代の神々も、呪術も、護符も、彼女の思考のうちにはあるが、真に彼女の本質にかかわってはいない。これを要するに、彼女は矛盾をもっていない。かかる娼婦がかかる聖女に轉身することは、論理的必然であって、正確にいえばそれは轉身ですらない。タイスは「回心」するのではなくして、自己をつらぬくのにすぎない。

しかしながら、まさに「哲学小説」としての「タイス」は矛盾の呈示でなければならず、したがってその矛盾は、タイス以外の人物によって示される。

## 五、パフニユス

「タイス」の登場人物は、いずれもそれぞれに明確なひとつの立場を現わしている。日常生活の平凡な道德的平安のなかに、確固たる信仰の慰めを見いだしている穏和な老修道士パレモンしかり。無感覚状態に幸福を得るに至っているティモクレスしかり。優雅な懷疑主義者ニシアスについては、さらに贅言を要すまい。そしてさらに、さまざまな思想とことばとがぶつかりあう華麗な場面として「哲学者の宴」の章がある。そこでは一定の意見が優勢を占めることがなく、各人各様の真理が無雑作に投げだされるといふかたちで、すなわち矛盾のありのままの呈示という手段で、読者を懷疑へとさそうのである。この論のさいごに述

べるであろうように、それこそが「タイス」のテーマであり、目的であった。

さて、しかるにここには、いわばその一身内に矛盾を内包するただ一人の人物がある。主人公パフニウスがそれである。ゆえにしばらく、彼の性格と彼の蒙る誘惑とを分析してみよう。

パフニウスの矛盾はまずその生いたちに由来する。アレクサンドリアの貴人の子なる彼は「冒瀆の文芸」を学んで育ち、「詩人の世迷い言」に心うばわれ、彼の「精神の迷蒙」は「神の本性、属性、その存否をすらも」平然と論議するほどだったのである。二十才のとき翻然として真理を悟りキリストに帰依し、やがて一年のちにはすべてを捨てて砂漠に隠遁する彼は、それゆえ無智な僧侶ではなくして、すくなくとも学友ニシアスと同等の学殖教養ある男である。彼はキリストを知るまえに、多神教の神々を熟知している。この一点において彼もまた実はリュコノエの後継者なのであり、リュコノエから小説のタイスが受け継がなかった一面を引きついでいるということが出来る。このゆえに、彼はパレモンのような善良な無智に安住することができない。彼の態度の根本を問えば、それはきわめて意志的であり知的である。彼のはげしい苦行といい、タイスの救済を思い立ち、あえてパレモンの諫止にもかかわらずそれを実行したことといい、すべては彼がおのれの意志

を善きものと信じたことによる。タイスにたいする彼の関心はもともと欲情であったのに、彼は自分の内密の動機について盲目であった。この自信こそが傲慢の罪にほかならない。また悪魔の化身なる金狼シヤカルの描写は、この小説のもっとも印象的な数場面をなしているが、物語のはじめに、月光を浴びて静かに彼の僧房のまえに坐っている七匹の金狼は、むろん彼の崇拜者たちが理解しているように彼の聖徳のゆえに僧房に入り得ずにいるのではなくして、彼の罪のゆえにそこに惹きよせられて控えているのである。すなわち彼はタイス救済を経て「墮落」するのではなく、はじめからいわば悪魔とともに在ったのであり、彼のペルソナリテもタイスのそれと同じく、やはり変っていないのである。彼の「墮落」は、はじめ一致していた善の彼の意識と彼の現実とのあいだに生じた破綻にほかならない。あるいは別のいいかたをすれば、はじめ一致していた善の彼の意識と彼の現実とは、実は分裂していたのであって、物語の結末において、彼が顔を撫でてみて「おのがみにくさを感じた」とき、その二つはついに一致するのである。そのみにくさは、修道女たちをして「吸血鬼、吸血鬼」と叫んで逃げ去らしめるような、怖るべきみにくさであった。パフニウスは自分自身のかくしもっていたおそろしい人間性の自覚に到達したのだ。この絶望的な破綻、あるいは一致のみが、あり得る唯一の解決である。この一致は悲劇であ

る。ゆえにA・フランスはこの同じテーマを、のちに「人間悲劇」なる作品において発展させることとなる。この作品についてはまた別の機会に論ずることとするが、ただ一言記しておきたいのは、「人間悲劇」の結末—人間としての自覚に達したフラ・ジョヴァンニが美しき悪魔の肩にもたれて泣くという—には作者の抒情的なゆとりが感ぜられるのにたいして、「タイス」の凄じい最終場面はただパフニユスを絶望に追いつめていくことである。しかも、パフニユスなる人物が生きてくるのはまさにこの点によるのであって、パフニユスの性格のまことの力は「顔を撫でてみおのがみにくさを感じる」その知性にある。

パフニユスの知的な性格、態度について、いささか物語をさかのぼってみよう。それは彼の教養そのものだけでなく、主として他人の立場にたいする理解ないし黙許として現われている。彼は強いてティモクレスに御法みのりを説こうとはしない。「なぜなら不信心者と論議して、彼等を回心させるどころか、かえってふたたび彼等を罪に導くことがあるからである。それゆえ真理を所有する者は慎重にこれをひろめなければならぬ。」

彼の沈黙がもっとも印象的なのは「哲学者の宴」の場においてである。ここに繰りひろげられる数々の瀆神の言葉に彼がなんら反撥しないため、この章はアナトール・フランスの饒舌バヴァルデーシュの趣味によるものであって物語の筋とのかかわり

が弱く、したがって小説の構成が緊密を欠くと考えた読者は少くなかった。しかしまさにさきに挙げた二つの理由からして、この場面は決してついたりではない。すなわち第一には相異なるさまざまの立場を並叙する必要から。第二には異説にたいするパフニユスの、容認ではないにしても、印象を受容することを拒否しない態度のゆえにである。誘惑はまことにここから始まるのである。パフニユス自身がそれを知っていた。妄想が彼を苦しめはじめるとき、彼は神に向けた「優しい非難」のなかで呟く。「あなたがいつしよに来てくださったあの悪魔の宴で、主よ、わたしは罪にけがれた、しかししたしかに、知性に欠けてはいない人々の、話をききました……」こうしていまや「彼の内部には新しい人間がいた。彼はいま神と議論していた」その結果は破局とならざるを得ない。仮借ない誘惑、苦悶、絶望。ちっぽけな悪魔が彼の帯を盗みとるにいたったとき、彼は思わずこう洩らす——「思考よ、どこにおまえは私を導いたのだ」そしてゾジウムに向って怖ろしい誘惑の体験をものがたるとき彼はいう——「わたしがアレクサンドリアに行ったとき、わたしは僅かの時間に多くの話を聞き、誤謬の軍勢はまことに数限りないのを知りました。彼等はわたしを追うてきて、わたしはいま槍ぶすまに囲まれているのです」

神はこれらすべての哀訴に答えない。恬然と罪を語って恥じぬニシアスがいまにも大地に呑みこまれるかとパフニユスは見守るが、大地は動かない。哲学者の宴に現われたアリウス派のマルクスを見、その言を聞いて、彼は雷電の落つるものと恐れ感うが、そのようなことは起らない。神は終始沈黙し、シノールを奏する死せる乙女の幻影がついに彼を感わしおおせるときも、彼を救うものはなかった。

## 六、むすび

神の不在、そしてすなわち、聖化も誘惑も堕落も人間性のうちにのみ行われるドラマであるということ、それが小説「タイス」のテーマである。そこから何を結論すべきか。この稿を終るにあたって、筆者はプシカリ氏の引用している「リュニヴェール・イリュストレ」紙所載記事から、氏の触れなかった次の一節をひくこととする。「タイス」の作者の意図とその思想は、ここにのこりなく語られている。

「もしこのタイスというささやかな小説が、わたしの同胞たちをして、ときおり彼等自身、彼等の意見、彼等の精神について、疑いを抱かしめる力をもつならば、わたしはこれが十分に善く、かつ有益であったと思うことにしよう。わたしは矛盾をあつめた。わたしは対立を明らかにした。わたしは懐疑をすすめた。おもうに、哲学的懐疑にまさる

ものはない。哲学的懐疑は、人々の心に寛容を、宥恕を、聖なる憐憫の情を、すべてのやさしき徳をうまれさせる。それらの徳のみが、愛すべきものである。その他の徳は、そのためにはらわれる犠牲ほどの価値をもたない」

## 〔註〕

① 第三書房刊。リュシアン・プシカリ氏の「まえがき」はフランス語原文のままここに収録。

② *Le Livre d'or du centenaire d'Anatole France*, Calmann-Lévy, 1949.

③ この集会において、一八九四年以後A・フランスの居邸であったヴィラ・サイド五番地の壁にその旨を記した銘版がとりつけられた。アナトール・フランス協会を代表してクロード・アヴリーヌ、そしてパリ解放委員会を代表してマリオ・ロックが演説をしている。

④ 「ジャンヌ・ダルクの生涯」*La Vie de Jeanne d'Arc*, 1908の長文の序のなかに、次の句がある「……わたしは未来における人民の結合を信ずる。わたしはそれを、エピクテータスとセネカの昔、ラテン精神のうちに形成され、数多の世紀にわたってヨーロッパの野蠻のためにかき消され、近代にいたつてもっとも高潔な魂のうちにふたたび点ぜられたところの、人類にたいするかの熱愛をこめて、呼びもとめる」

⑤ 「よりよき時代へ」*Vers les temps meilleurs*, 1906は、彼の社会評論集の題。後述の「社会生活三十年」の副題にも用いられている。

⑥ 一九〇三年九月十三日、トレギエにおけるエルネスト・ルナン記念像除幕式の演説。

⑦ 「リュコノエ」は実は「黄金詩集」でなく「コリントの結婚」に併せおさめられているので、この点はプシカリ氏の書

き誤りであらう。

⑧この序文は、後述の未刊の「タイス」の断片とともに、一九二四年十二月 Champion 社より刊行。そのご全集版の巻末に収録されている。

⑨ La Légende de Sainte Thais, comédienne. 原文を付録として収める。

⑩「マドレーヌのかた」 La Part de Madeleine は一八六九年の Le Parnasse contemporain に発表。一八七三年刊の「黄金詩集」 Les Poèmes dorés に収録。「リョロンエ」 Leuconoe は一八七六年 La République des Lettres に発表。同年刊の「ロリントの結婚」 Les Noces Corinthiennes に収録。

⑪「レタ・アシリア」 Laeta Acilia 一八八八年四月一日 Le Temps に発表。一八八九年刊の短篇集「バルタザール」 Balhasar に収録。

⑫この断片は前記の序文とともに全集版の巻末に収められている。

〔付録〕 聖女タイスの伝説の原文をここに収録する。このテキストは、本文中にのべたとおり、全集版にもその他の版にも再録されていないので、ここに収録すること、資料として価値をもつものと考ええる。綴字のあやまち（あるいは誤植）なども、そのまま保存した。

## La Légende de Sainte Thais, comédienne

(cette pièce est extraite d'un recueil actuellement  
sous presse)

En ce temps la (sic) vivait une femme au pays  
Des Egyptiens, belle, et qu'on nommait Thais;  
Et les graves vieillards venus de Galilée  
Prêcher le nouveau Dieu dans la vieille vallée  
Du Nil, tournaient la tête et fronçaient le sourcil  
Lorsque Thais passait: Or, ils faisaient ainsi  
Parceque (sic) cette femme avait des moeurs infâmes;  
Mais ils disaient qu'il faut craindre toutes les femmes,  
Chacune ayant en elle un puits d'impureté,  
Lieu sale et dangereux, par le diable hanté;  
Que s'il est beau, leur corps est une tour très sure (sic)  
Où guette tout armé le démon de luxure,  
Et qu'enfin la beauté n'est qu'un piège qu'il plut  
Au Seigneur de dresser au chemin de salut.  
Ils rapportaient d'ailleurs, et la chose est à croire,  
Que la vierge Marie était difforme et noire;



Car autrement son corps, vase d'élection  
Eut exhalé le trouble et la perdition.  
De plus, bien que Thais eut reçu le baptême,  
Elle jouait aux jeux qui tous sont anathème (sic) ;  
Et c'était aux gentils un spectacle très cher  
De voir Thais—trionphe odieux de la chair!—  
N'avoir pas honte alors qu'en la danse profane,  
Ses blancs nus blanchissaient leur voile diaphane  
Elle avait de son corps fait à l'Esprit du mal  
Non pas un logement mais bien un arsenal :  
Elle avait de grands yeux fendus comme l'amande,  
Une lèvre charnelle et froide, et très friande,  
Et les ailes du nez souples qui par moments  
Se soulevaient avec de longs frémissements.  
Quelquefois, languissant au feu subtil des fièvres,  
Seule, elle savourait les baisers de ses lèvres ;  
Puis des candeurs d'enfant lui venaient tout à coup ;  
Elle avait de l'oiseau, de la chatte beaucoup,  
De la panthère même—étant très femme en somme,  
Faitte comme Eve enfin pour la perte de l'homme.  
Thais était surtout célèbre pour le chant,  
Et les pères disaient : qu'elle meure ! sachant  
Que la luxure avide et semblable à l'hyène

Du désert, rôde autour de la comédienne.  
Cette femme perdait les âmes à foison,  
Et les pères avaient certainement raison  
De condamner la danse et les jeux du théâtre  
Que Sénéca blâmait bien qu'il fût idolâtre.

Thais n'y prenait garde, ayant l'utile honneur  
D'être assez familière avec le gouverneur ;  
C'était un petit homme à ventre de Silène,  
Lourde, un peu bien colère, ayant déjà l'haleine  
Courte, mais portant bien son quadruple menton,  
Et ronflant en public sur un très noble ton ;  
Il était d'une humeur atroce, mais à table  
Ses convives l'auraient trouvé fort supportable,  
N'eut été toutefois son malheureux travers,  
Sitôt qu'il avait bu, de réciter des vers.  
Pourtant il eut du goût un soir qu'il était ivre,  
Et, de l'aveu de tous, sut bien choisir son livre :  
Il prit le saint poème, au vulgaire inconnu,  
Que chante pour le sage un corps splendide et nu :  
Déliant de Thais les ceintures glissantes,  
Il fit jaillir ses seins en strophes frémissantes ;  
Et, calme, triomphant, ce corps harmonieux,

Pareil au marbre ou rit Kypriis(sic), mère des dieux,  
Comme aux beaux jours d'Hellas et sur le mode  
antique,  
Chantait l'hymne sacré de la beauté plastique.

Ces nudités de marbre, ayant de froids ennuis,  
Des nudités de chair, par d'indulgentes nuits,  
Aux regards d'un amant livraient Thais sans voile,  
Baignant ses flancs du lait que versent les étoiles.  
Cet amant, cet heureux profanateur était  
Un beau centurion qui souvent la battait,  
Mais s'était fait près d'elle une invincible attache  
Par sa belle façon de friser sa moustache,  
Et son art à sangler son ceinturon de fer.

Ainsi vivait Thais, sans souci de l'enfer,  
Quand, un jour, son amant, assis sous le portique,  
Ayant bu longuement du vin maréotique  
Avec un avocat de Thrace son pays,  
Devint très expansif en causant de Thais,  
Et mit notamment sa rhétorique à décrire  
Cette chute des reins qui dessine un sourire  
Et que la Kallipige (sic) en pleurs, ayant un pli

Farouche sur son front de marbre encore pâli,  
Brtle de fouetter d'épines et de roses.  
Il roula sous la table en racontant ces choses,  
Et se réveilla, fort surpris, dans un cachot  
Où l'on lui fit un bain, le temps étant fort chaud,  
Avec avis pressant que pour être agréable  
Au gouverneur, il eût, comme soin préalable,  
La bonté de s'ouvrir les veines.

Thais prit

Excessivement mal ce petit trait d'esprit  
Du gouverneur, et lui fit des nuits difficiles:  
Il la laissa, n'aimant que les beautés dociles.  
Vers ce temps là, Thais, par hasard, traversait  
La ville au clair de lune, et, lors qu'elle (sic) passait  
Les grands sphinx, accroupis le long des avenues,  
Se sentaient pénétrés de douceurs inconnues;  
Les passants, aveuglés de ses gorgerins d'or,  
Disaient: "Nous en mourrons, c'est la déesse Hâtor(sic)!"  
Isis de ses rayons la baisait amoureuse;  
Mais elle eut un frisson, étant un peu peureuse,  
Quand elle vit un groupe étrange, sale, impur,  
Qui tachait d'un grin brun le struc rouge du mur.

Cachant ce qu'elle put de ses blancheurs de cygne  
Elle n'en vit pas moins le groupe faire un signe  
De croix, à son approche; et sentit une odeur  
D'huile rance et d'oignon lui soulever le cœur.  
Aussi, chez les chrétiens, c'est un signe de race  
D'avoir l'haleine infecte et de suer la crasse,  
Et de n'aller au bain de leur vie, étant, eux,  
Couverts de lèpre blanche et de maux très honteux,  
Ils ont soin de cacher leur chair, avec décence,  
Pour n'induire la femme en la concupiscence;  
Et, comme le seul bien qui doit nous être cher  
Réside, à leur avis, au tourment de la chair,  
Torturer leur paraît chose très charitable,  
Et l'œuvre du bonheur, pieuse et délectable.  
Ce groupe s'allongea pour barrer le chemin;  
Chaque chrétien tenant une pierre à la main.  
L'un d'eux : Cette femme a souillé son corps, demeure  
Du Saint-Esprit, dit-il, ainsi donc qu'elle meure!  
—“Qu'elle meure! reprit la troupe lentement;  
Et l'ombre eut, à leur voix, un morne ébranlement.  
Thais ne bougeait pas: elle était blanche, roide  
Sans voix, le front perlé par une sueur froide;  
Les bras s'étant levés, elle ferma les yeux...

Puis se sentit saisi (sic) par un poignet nerveux.  
Thais ne doutait point qu'elle fut vraiment morte;  
Mais sa foi n'était pas très arrêtée, en sorte  
Qu'elle ne savait trop, du diable ou de Typhon,  
Qui l'emportait ainsi dans l'abîme sans fond.  
Elle s'abandonnait: la suave cambrure  
De ses reins sur le sol versait sa chevelure;  
Sa chair silencieuse avait cette clarté  
Que verse au front des morts l'aube d'éternité.  
Cependant sa paupière, avec effort se lève:  
Elle voit vaguement, comme à travers un rêve,  
Un grand vieillard farouche, à l'œil étincelant,  
Et dont la crâne lisse était tout ruisselant  
De lumière. Il parlait et sa grande voix sombre  
Avait des grondements qui s'enfonçaient dans l'ombre,  
Et sa barbe d'argent, se tordant et rampant,  
Pareille aux clairs anneaux d'un mystrique serpent,  
Jetait de grands éclairs sur sa large poitrine,  
Q'enflait (sic) le souffle saint de la grâce divine  
Or il disait ceci:  
“Je suis vraiment touché  
De voir autant de gens n'ayant jamais péché:  
Puisque chacun de vous, soulevant une pierre,

Semble avoir grand souci de jeter la première,  
Se souvenant d'aillers de ce qu'a dit le Christ  
Aux juifs lapidateurs, ainsi qu'il est écrit,  
Je tiens pour assuré que, par grâce très haute,  
Aucun d'entre vous tous ne commet une faute.  
Or, moi, je viens vous dire avec humilité:  
Jugez moi donc aussi, selon votre équité.  
J'ai prié soixante ans, et ma chair est restée,  
Dans la soif et la faim, débile et révoltée;  
Certes, pour la dompter, j'ai souffert de grands maux:  
J'ai fait mon front semblable aux genoux de chamaux,  
Le tenant prosterné jour et nuit sur le sable,  
Et je suis cependant un pécheur (sic) misérable.  
Vous levant vous avez dit: nos sommes la foi;  
Je me lève et je dis: le coupable c'est moi.  
Donc frappez, comme Dieu, sans colère ni haine(sic),  
Ce vieux pécheur avec cette channéenne.  
Mais, si l'esprit de meurtre est en vous, je vous dis:  
Allez et périssez; vous êtes des maudits;  
Tenez, comme Caïn, votre droite cachée  
Sous vos manteaux, et soit votre droite séchée.”  
Il dit, et le troupeau des rôdeurs effarés

S'enfuit, la tête basse et les coudes serrés;  
Chacun, pour mieux courir, jétant sur la sandale  
de son voisin la pierre énorme de scandale.  
Et Thais était la(sic) qui baisait les pieds nus  
Du vieillard, ses pieds noirs mais beaux d'être venus.  
Enfin elle lui dit: “Sois mon Seigneur et maître,  
Et je te servirai, si tu veux le permettre...  
Tu me fais peur vieillard, et je voudrais t'aimer!  
—Femme, répondit-il, cesse de blasphémer!  
Va cacher loin de moi la flamme incendiaire  
De tes yeux effrontés, toi qui, dans la chaudière  
Des charnelles amours, des sales voluptés,  
Bous, sous les flots infects de tes impuretés!”  
Elle: J'ai honte ô ciel!” lui “Pour cette parole  
Dieu rallume ta lampe, ô pauvre Vierge folle!”  
Thais alors: “Je vois clair enfin, et je sens  
S'élever dans mon cœur des repentirs puissants.  
Pardelà(sic) les longs jours de ma jeunesse amère,  
Je me souviens l'ave que m'apprenait ma mère;  
Puis elle me parlait de Notre Père aux Cieux,  
Et j'avais vaguement un vieillard dans les yeux...  
Père il te semblait... mais avec moins de flamme  
Au regard... Je prierai ce dieu du fond de l'âme.

Enfant, je sentais bon lorsque j'avais prié.

—Femme le parfum tourne en un vase souillé;

Tu ne peux prier Dieu, source éternelle et pure,

D'une bouche salie aux baisers de luxure,

Ni regarder les cieux, son séjour de clarté,

Avec des yeux, miroirs de l'impudicité,

Mais, un cilice aux reins, aux hanches une corde,

Regarde l'orient, criant: Miséricorde!

Debout dans la cellule ou (sic) je te conduirai.

La folle enfant, pensive alors, lui dit: j'irai.

Puis elle lui demande à revoir sa demeure.

Là, d'amoureux parfums le troublent; mais sur l'heure,

Elle entasse en monceaux ses gorgerins d'émail,

Ses bagues, ses colliers, l'écrin et l'éventail

De cygne, y met le feu: l'âcre et sombre fumée

Couvre d'un voile noir la panoplie aimée,

Les grands vases d'argent aux flancs lisses et clairs,

Les petits miroirs ronds qui lancent des éclairs,

Les voiles, les tissus aux blancheurs profanées,

Les écrins vomissant des perles égrenées,

Et le coffret de cèdre avare et sûr, qui rend

Ses lourds trésors avec son esprit odorant.

Thais allait tremper ses lèvres altérées

Dans le torrent profond bes voluptés sacrées.

Le vieillard la mena par les sables brûlants.

Elle marchait avec ses petits pieds sanglants;

Ignorant que Jésus, au bord de la fontaine,

But dans l'urne de grès de la samaritaine,

Elle allait par la pleine aride, elle cherchait

Le frais torrent d'amour que le dogme cachait.

Quand ils eurent atteint la dure Thébaïde

Le vieillard mit Thais dans une loge vide,

C'était comme un cercueil se dressant sur un boût,

Et dont le mort vivant restait toujours debout.

Comme on scelle une tombe, il en scella la porte

Avec un sceau de plomb, car Thais était morte,

Morte à l'éternité par la damnation,

En elle, étaient les vers et la corruption.

Elle cria vingt mois, et, le vingt-et-unième,

L'homme leva le sceau qu'il avait mis lui-même,

Puis, ayant vu le front de celle qui pécha (sic),

Lui, le saint et le fort entre tous, il coucha

Son front dans la poussière et dit: "Femme très-sainte,

Car la gloire téclaira et ta tête en est ceinte,

Je te viens demander ta bénédiction;

Je suis le bouc impur, brebis d'élection!

Au nom du bon pasteur, verse moi l'espérance :  
Le verde est dans ton sein, car le verbe est SOUT-  
FRANCE.

Mais, le front nuageux, l'ange descendit  
Vers Thais pénitante et gravement lui dit :

“Tu n'as pas versé, femme, ainsi que Madeleine,  
L'amphore de parfums en ton cœur encor pleine,  
Donc, ceins tes reins, ô femme, et prends un bâton  
blanc,  
Et suis, par le désert, l'étoile au front tremblant.  
Il dit, et de sa main fait glisser une étoile,  
Comme un doigt féminin laisse échapper un voile.

Thais suivait l'étoile, et le soir incertain  
Sous l'astre conducteur tout-à-coup sembla teint  
D'une blancheur d'aurore et de lueurs d'opale.  
Thais vit une femme au long sourire pâle,  
Et dit : “Je viens à toi, comme jadis alla,  
Emportant ses parfums, celle de Magdala. ”  
La femme répondit : “C'est le ciel qui t'amène,  
Ma soeur, j'ai soif du lait de la tendresse humaine.  
Interrompant leur cours au ciel étincelant,

Vers toi qui t'avancas blanche, sous tes blans voiles,  
J'ai cru les astres clairs se pencher en tremblant ;  
Et j'ai vu, dans ton front, se mirer les étoiles.

—Et toi, tu me semblais, de bien loin à te voir,  
Un palmier solitaire, o ma soeur bien-aimée ;  
Et je buvais, parmi les souffles frais du soir,  
La semence d'amour de ta bouche embaumée.”

L'étoile scintillait sous le bleu firmament,  
Et le frais ruisseaulet susurait mollement.  
Et leurs lèvres alors, avec de doux murmures,  
S'entr'ouvrirent ainsi que des grenades mûres ;  
Et, comme des oiseaux qui veulent se poser,  
Voleterent devant le fascinant baiser.

L'ange était radieux : il descendit vers elles,  
Et leur faisant un dais avec ses grandes ailes  
De lumière et d'azur, plus pur que le jour,  
Aimez-vous, leur dit-il, car le verbe est AMOUR.

Anatole France

(Le Chasseur Bibliophile, Revue littéraire, 3e année, No. 3  
—mars 1867, Paris, Léon Roudiez, Lib-éd. pp. 80—87)